

5. 名所・旧跡

5. 1 大草城と寺本城

わが国の城郭は、数的には中世特に南北朝時代から桃山時代までの間が最も多く、総数は2万を超えるといわれている。地域の中核的な城郭に限っても3千には達するとされている。しかし、元和元年(1615)に徳川幕府の「一国一城令」が出されると一万石以上の大名の居城に限定され、およそ300に整理された。本市域の中世以降の城郭については、大草城、寺本城(堀之内城)、佐布里城の三城が知られている。

大草城については、「尾陽雜記」に織田源五入道有楽の住まいとして築城されたと沿革が記され、「張州府志」にもやや詳細な記述があるが、築城の時期は明確ではない。後に徳川芳直と光友に仕えた山澄淡路守英龍が大草を給知されたので、大草城もその所有となり、寛文六年(1666)城址より西方に屋敷を構えた。さらに、元禄6年(1693)光友が隠居の際、知多郡はすべて藩の直轄地となったため山澄氏も転地したが、この間に城址に秋葉社と八幡社が勧請された。

大草城の規模については、記述されているものによって様々だが、「尾州古城志」には、「城墟東西七十八間、南北三十六間二重堀」とあって本丸の規模を示している。この数値は「古城巡覧」も同じである。

寺本城は青鱗城とも堀之内城とも呼ばれ、八幡堀之内にあった。「尾張志」には「堀内村にありて今天王山という東西五十間南北二十間花井播摩守その子勘八郎二代居しといひ伝へたり」とある。天守の鬼瓦は青銅の鱗形をしていて、夕日に映えて伊勢湾を通る舟からよく見えたという。青鱗城の名の由来である。

花井氏は今川氏に荷担していたのであるが、桶狭間戦の後は信長に服属することになった。大手門前や本丸へ通ずる石垣など中世の山城の面影をしのばせている。

5. 2 戦乱の西知多と水軍

知多地方は、緒川・常滑の水野氏、大野・内海の佐治氏という二大勢力のほかに、寺本の花井氏、木田の荒尾氏、坂部の久松氏などの土豪が各地に割拠し、互いに姻戚関係を結んで牽制しあっていた。知多市は、ほぼ南の半分を大野城による佐治氏が、北半分は寺本城による花井氏がそれぞれ勢力を張っていた。

永禄3年(1560)今川義元が桶狭間で信長の急襲をうけて戦死したのを境に、知多地方はほぼ信長の勢力範囲となり、知多地域の土豪や大野をはじめとする水軍も永禄5年、信長に属することになった(千賀家文書)というが、情勢はいまだ平穏ではなく、信長の支配下でも戦いを続けねばならなかった。

知多郡の水軍はこれまで大野水軍の名で代表されていたのであるが、実際には、寺本城の花井氏も相当な水軍の将であり、各地の戦いに参加していた事実が、「東竜寺古過去帳」「信長公記」からもうかがわれる。